

蘇台覽古（李白）

旧苑荒台楊柳新  
たにのこえん ころうだい ようりゆう あら

解説 春秋時人に呉王夫差の築いた姑蘇台に上つて昔をしのんだ詩。

舊苑荒臺楊柳新 菱歌清唱不勝春  
只今惟有西江月 曾照吳王宮裏人

菱歌清唱春に勝えず  
りようか せいしよう はる た

語釈 ※蘇台|| 呉王夫差の築いた姑蘇台のことで、姑蘇山上にある。  
※覽古|| 古跡を見て昔をしのぶこと。 ※旧苑|| 古い庭園。 ※荒台|| 荒れた高台。 ※菱歌|| 娘たちが菱の実を採りながら歌う民謡。  
※清唱|| 澄んだ声で歌う。 ※不勝|| たえられないこと。 ※西江|| 姑蘇台の西を流れている川。 ※呉王宮裏人|| 呉王は夫差、宮は姑蘇台、宮裏人は宮中に仕えた夫差の寵妃・西施をいう。

只今惟西江の月のみ有り  
ただいま ただ せいこう つき あ

曾て照らす 吳王宮裏の人  
かつ て しょうらす ごおう きゅうりひと

通釈 古い庭園、荒れはてた高台に柳の枝だけは春の訪れと共に芽を吹いている。川の方からは、小舟を浮かべて菱をとる娘たちの歌声が清らかに聞こえてきて、春の感傷にたえられない。今も昔も変わらないものは、西の川の上に出る月の光だけだ。この月は、曾て呉王の宮殿にはなやいでいたあの絶世の美女、西施を照らしたのだった。